二、履歴書
三、師範學校卒業者は地方長官の承認書
四、戸籍謄本、寫眞並成績證明書提出手續等本科に同じ

(三) 出願期限、試驗期日等
一、出願期限　二月十六日より三月十一日まで
二、試驗日割發表　三月十五日午前本校内に掲示す
三、試驗期日　三月十六日より四日間

(四) 宿所屆、入學許可者發表等總て本科に同し

(五) 選拔試驗課目（中學校卒業程度）左の通り

實技
- 石膏像寫生（木炭畫）
- 寫生（毛筆又は水彩畫）
- 圖案（平面及立體）

用器畫（幾何畫、投影畫）
國語（書取、解釋、作文）
習字
英語
口述試問
身體檢査

関連事項

① 白浜徵の死去と図画師範科

前出月報記事にもあるとおり、昭和三年四月九日、教授白浜徵が死去した。白浜は明治四十年に図画師範科が創設されて以来二十年間に亙って同科主任をつとめ、その間に三百五十名以上の卒業生を送り出し、図画教育界に君臨した。白浜については既に本書第二巻186頁、273頁、376頁等に記したとおりであるが、なお晩年の大正八年以降は文部省視学委員に任命され、同十年九月以降は勅任官待遇となった。

白浜の担当科目は「図画教授法」週四時、「教授練習」週二時、「英語」週一時であったが、白浜の死後、図画師範科の授業科目と担当者は次のようになった。

図画師範科担当学科目並びに事務　昭和三年四月調

担任学科目	毎週時間数	官職名	氏名	備考
絵画 日本画	四九時	教授	平田 栄二	（主任）
絵画 西洋画		助教授	田辺 至	
手工	三時	同	松田 義之	図画師範科事務
手工教授法	三時	助教授	高橋 吉雄	同
手工	九時	同	松田 義之	
教授法、教授練習	六時	同	高橋 吉雄	
同	二時	同	松田 義之	
用器画法	四時	助教授	同	
同	二時	講師	鈴川 信一	
習字	九時	同	岡田 起作	
修身	二時	同	武田 信一	
教育学及心理学	四時	同	同	
東洋美術史	二時	助教授	田辺 孝次	
西洋美術史	二時	教授	矢代 幸雄	
美学	二時	講師	村田 良策	

色彩学	二時	同	同
図案法	二時	教授	島田 佳矣
英語	四時	助教授	森田亀之助
体操	六時	講師	鈴川 信一
		配属将校	神保豊次郎
		講師	斎藤 幸晴

（「大正九年十二月ヨリ要書類綴　教務掛」による。）

この表の顔触れからも明らかなように、教師の半数以上は本校卒業者であるが、その中でも松田義之と高橋吉雄は図画師範科の卒業生で、白浜徴の愛弟子であった。松田は明治二十四年十一月愛知県一宮町生まれ。大正六年図画師範科卒業後青森高等女学校教諭、三重県立神戸中学校教諭等を経て同十年五月本校助教授となった。高橋は同じく明治二十四年四月盛岡市生まれ。大正六年図画師範科卒業後、東京市橋本尋常小学校訓導、同富士見小学校訓導、府立第六高等女学校教諭を経て同十五年八月本校助教授となった。白浜の担当していた「図画教授法」「教授練習」はこの二人の後継者に引き継がれたのであった。

② 図画師範科回想（故松田義之氏談話筆記）

〔編者は十数年前に長谷川信也氏（昭和八年図画師範科卒）に随伴して松田義之氏（昭和五十六年歿）宅に伺い、同氏の本校在学及び在職中のことを話して頂いたことがある。そのときの談話筆記を纏めて、ここに紹介しておく。〕

私は大正三年の入学だが、入学式は印象的であった。講堂には先生方がずらりと並び、一流の人たちが最前列に並んでいて、正木直彦校長が例の訥弁で、考え考えしながらゆっくり話す。「君らは入学を許されたが、ここに一流の先生方が並んでいる。だから、うんと先生方の知恵を搾り取れ。お寺の鐘のように、うんと力を出して大きい声を出させなければならん。」と諭されたのであった。正木校長は食堂で昼食後の雑談の折りなどはよく一人で喋っていたが、とても良い話だった。

師範科の授業は本科とは全く別個に行われた。本科とはなるべく引き離しておく方針だったらしく、従って本科生との交流は少なかった。学科のうち、まず白浜徴先生の図画教授法は、主に『新定画帖』について詳しく説明するのであったが、理論的のものでなく、むしろ極めて実践的な内容で、特に先生の板書（ばんしょ）は比べるものが無いほど見事だった。先生はくだけた人であったが、一面非常に厳格なところがあって、素行、態度に厳しく、教官室でも先生の前では皆タバコを吸わなかった。生徒が髪を長く伸ばしていたりすると、教官室へ連れて行って自ら刈ってしまうのであった。

他に、東洋美術史は大村西崖、沢村専太郎、西洋美術史は矢代幸雄で、矢代先生はまだ大学を出たばかり。西洋の絵について感激して教えるから、生徒に大変人気があった。解剖学は久米桂一郎の担当だったが、これは師範科には不要なので、のちに削られた。用器画法は小島憲之。この人は一高の教師で、一番怖い先生だった。修身ははじめ高師教授の乙竹岩造が、次いで女高師教授の下田次郎が担当したが、二人とも教科書無しの堅い話をされた。それに対し